徳の涵養による性格 形成

2015/06/08

「イエスが外に出ようとされると、 ある人が走りより、イエスの前にひ ざまずいて尋ねた。『善い先生、永 遠の命を受け継ぐためには、何をす ればよいのでしょうか』|(マルコ 10・17)。わたしたちも主の弟子と して使徒たちとともにその場にいた なら、主の答えに驚いたかも知れま せん。「なぜ、わたしを『善い』と 言うのか。神おひとりのほかに善い 者はいない | (マルコ10・18)。イ エスは質問に直接答えることを避け るかのようです。少し神妙な教え方 で、あの青年が感じていた気高い望 みの底にある究極の意味に注意を向 けさせます。「イエスは、その青年 の質問が実に宗教的な質問であり、 人間を引きつけると同時に人間に義 務を負わせる善は、神に源を発し、 まさに神自身であることを示されま す。神だけが、『心を尽くし、精神 を尽くし、思いを尽くして』(マタ イ22・37) 愛されるにふさわしい方

なのです」(聖ヨハネ・パウロ2世 『真理の輝き』9)。

永遠の生命に入るために

主はすぐにあの大胆な質問に戻り、 しなければならないことを教えられ ます。「もし命に入りたいなら、掟 を守りなさい」(マタイ19・17) と。福音書によれば、あの青年は信 心深いユダヤ人でしたので、この答 えに満足して帰って行ってもおかし くなかったでしょう。先生は彼が小 さいときから守ってきた掟を答えと して示され、彼の確信にお墨付きを 与えられたわけですから。しかし、 青年は権威をもって教えられる新進 気鋭のラビの口から聞きたいと思い ました。この方なら思いも寄らぬ展 望を見せて下さるだろうと直感的に 見抜いていました。そして尋ねま す。「どの掟を」(マタイ19・18) と。イエスは隣人に対する義務を列 挙されます。「殺してはならない。

姦淫してはならない。盗んではなら ない。偽証してはならない。父母を 敬いなさい。また、臨時を自分のよ うに愛しなさい| (マタイ19・ 18-19)。それらは、いわゆる十戒 の第二の板に書かれた掟で、「その 善を守ることによって、神の似姿で ある人間の善| (『真理の輝き』 13)を守るものです。聖アウグス ティヌスによれば、それらは第一段 階というべきもの、つまり真の自由 という目的地に向かう道であって、 完全な自由を構成するものではあり ません。別の言い方をすれば、それ らは愛の道における初期の段階です が、まだ成熟し完成された愛ではな いのです。

まだ何が足りませんか。

青年はこれらの掟を知り守っていました。しかし、心の中でまだ何かできることがあると感じていました。 イエスはその心をお読みになりま す。「イエスは彼を見つめ、愛情を 込めて | (マルコ10・21)、挑発的 な言葉を投げかけられました。「あ なたに欠けていることが一つある。 行って、持っているものをことごと く売り、貧しい人々に施しなさい。 そうすれば、天に宝を蓄えることに なる」(同)と。イエス・キリスト は、青年の心中に隠れていたよい人 間になりたいという気高い望みを彼 の前にお現しになりました。青年が 先生の要求をどこまで理解したかは わかりませんが、「まだ何が足りま せんかしという質問をを見ると、す るべきことがまだ他にあると薄々気 づいていたと思われます。彼はよい 心構えを持っていました。ただ、神 の掟にはもっと深い意味があること には気づいていなかったかもしれま せん。

神がわたしたちに望まれる生活と は、ただよい業をすることにあるの ではなく、良い人、徳のある人にな ることにあるのです。聖ホセマリアが正しく言っていたように、「並の善い人」になるのではなく、イエスがわたしたちの目の前に示されるこの上ない展望——「ただお一人の善い方」(マタイ19・17)——に見合った善い人になることなのです。

キリスト教的意味で成熟した人と は、自分の人生を自分で作り上げる ため、神に何がまだ足らないかを心 から尋ねる人のことです。ただ掟さ え守っていればよいという気楽な態 度から抜け出し、個人的な欠点を持 ちながらもイエスに付き従うことが 大切さだということを発見する人で す。そうするならば、イエスの教え によってわたしたちの価値観は一変 するでしょう。以前は臆病でちっぽ けだった心は、神が与えて下さった 自由によって大きく広がるように感 じるでしょう。「わたしはあなたの 戒めの道を走ります、あなたはわた

しの心を広くしてくださいました」 (詩編118 [119]・32)。

人格形成という挑戦

青年は「足りないこと」が、ただ掟 を守る人が閉じこもる安楽な住処を 出て、神と人々のため自分の人生を 捧げることであるとは予想していま せんでした。そして悲しそうに去っ て行きます。この悲しみは、突然現 れた神に自分を任せる代わりに、自 分の考えにしがみついて生きようと する人にはいつも起こることです。 神は、神の自由をもって生きるよう に人間をお呼びになりますー「キリ ストはわたしたちが自由であるよう にと、私たちを自由にしてくださっ たのです| (ガラテヤ5・1)。そし て、つまるところ、わたしたちの心 はそれに達しない中途半端な態度に は満足できないのです。

成熟するとは高い理想に従った生き 方を学ぶことです。若干の掟を知る

こととか、他人に迷惑をかけない生 活をすることとかで満足することで はありません。善い人、つまり聖人 になろうと決意するとは、キリスト と一致し、キリストが提示する生き 方のすばらしさを発見することで す。ですから、道徳の掟が何のため かを知ることが求められます。それ らの掟は、どんな善を希求しなけれ ばならないか、完全な人格に達する ためにはどのように生きる必要があ るかを教えてくれるからです。この 目標が達成できるために、キリスト 教的な諸徳を自分のものとすること が必要なのです。

人格形成を支える柱

道徳の掟を知ると言うことは、抽象的な論理を展開することでも、または技術を身につけることでもありません。良心を形成するには堅固な性格を育てることが要求されまが、その堅固な性格を支える柱のようなも

のが徳なのです。徳は人格の土台を 作り、安定させ、平衡を保たせま す。わたしたちが自己中心主義から 出て、外の世界、つまり神と隣人に 心を向かわせるように導きます。徳 のある人は、困難を克服できる人、 何事にも中庸を保つ人、正しく、高 潔で、一本筋が通った人です。反対 に、徳のない人は、壮大なプロジェ クトを志すことも、大きな理想を実 現することもなかなかできません。 その生き方は、場当たり的で絶えず 左右にぶれ、他人から信頼を得るこ とも、自分自身を信頼することも難 しい。

徳を涵養するなら、人はより自由になります。徳とは、慣れや惰性とはまったく異なるものです。言うことですが、よい習性、いるとですが、よいできるようになけるにできるようになるには、一度だけよい行いをすれば足りるわけではありません。何度も

心を新たにする

人間徳も超自然徳も、わたしたちを 善に、すなわち人の望みを満たして くれるものに向けてくれます。わた したちが本当の幸せ、すなわち神と の一致に到達するように助けてくれ るのです。「永遠の命とは、唯一の まことの神であるあなたを知り、エ た、あなたがお遣わしになったイエ ス・キリストを知ることです」(コイネ17・3)。徳を持てば、道徳のは に従って生きることが簡単にまります。 に従って生なら、掟を守る、 なせなら、掟を守る、まります。 ではなって見るのではなります。 大きのではなります。 大きのによってはないではないます。 を生きしていまするによってすが、 を生きしてするといまするといます。 を生きしてままするとによるといます。 にはおける基本的な態度といば、 における基本的な態度とですが、 における基本的な態度とですが、 における基本的な態度とです。

「生活における基本的な態度と心構えについて語っています」(『真理の輝き』16)。それは人を永遠の命に導くものです。

こうなると、聖パウロの次の言葉のように、キリスト教生活に成長する道が開かれます。「心を新たにして、生まれ変わり、何が神のみ旨が、すなわち、何が善であり、神に喜ばれ、また完全なことであるかを弁えるようになりなさい」(ローキを12・2)。恩寵によって、わたしたちは様々な出来事を今までとは違った

仕方で判断し行動するための基準を 持つようになります。物事をしてります。物事をしてりますの御旨にな神ののもにのののはないでで、を愛して、を愛して、ないのでででででででででできる生ないのがでいる。 はてとを愛していないでででででででできる生活をでいる。 を受しているがいます。 はなりがでいるが容易にでいるのがでいるが容易にできます。 が容易にできます。 が容易にでいるのが容易になります。

この道を歩むと、聖ホセマリアが 言っていた「分別の人」(聖ホセマリア、『道』、「著者より」)分別ではます。しかしています。というないではこう付け加えています。「分別は成熟さ、確信の揺るが表についての十分なおでは、教えについさ、強の一次を含えた数にでいる。このとのでは、あるべきキリスト教的人格者のでは、あるべきキリスト教的人格者のでは、あるべきキリスト教的人格者のでは、あるべきキリスト教的人格者のでは、あるべきキリスト教的人格者のでは、

姿を見事に描いていると言えるで しょう。それは、自由に決定を下 し、その決心を自分のものとする、 すなわち、自分の下した決定に責任 を持つことができる成熟した人のこ とです。形成の手段や、読書や反省 を通じて、また特に「人生のまこと の星と言える、正しく生きることの できた人々」 (ベネディクト16世 『希望による救い』49)の模範に よって得た、キリスト教の教えの深 い知識に裏打ちされたしっかりした 確信を持つ人です。これらの特徴 は、隣人に対する優しさに現れる精 神の繊細さと、有徳の生活に現れる 強い意志と連動します。それゆえ、 分別の人は、様々な状況の中で、神 は私に何をお望みだろうかと自問す ることができます。聖霊に光を頼 み、身につけた原則を見直し、自分 に助言を与えることのできる人に助 けを求め、首尾一貫した行動をとる ことができるのです。

愛の実り

このように考えると、正しい道徳生 活とは - 徳によって掟を生きること に具体化される - 善を求め善に成長 するようにさせる愛の実りであると 言えます。このような愛は、その本 性上、流されやすく不確かな感情を 超えます。つまり、愛はその時々に したいことや各瞬間の気分に左右さ れません。愛するということは、む しろ自己を与えることを前提としま す。神に愛されていることを知り、 自由を賭けるねうちがある大きな理 想のために、喜んで自分を捧げるの です。「自由に献身し、自分をささ げるとき、その自由な行為は愛を新 たにします。そして献身を新たにす るとは、若さと寛大さを失わず、大 きな理想をもちつづけ、大きな犠牲 を払う力を維持することです1 (『神の朋友』31)。

キリスト教的な完成とは、いくらか の掟を守ることや、自己抑制ができ る人や効果的な什事ができる人にな るというような部分的な才能を伸ば すことに限られることではありませ ん。むしろ、神に自己の自由を捧げ ること、「来て、私に従いなさい」 という招きに神の助けによって応え るように後押しします。愛に動かさ れ聖霊に従って生き、隣人に仕えた いと望み、神の掟とは、自分が進ん で選んだこの愛を生きるためのこれ 以上ない道であることを理解するこ とです。いくらかの規則を守ること ではなく、イエスについて行くこ と、つまり御父の御旨に喜んで従い ながら、イエスと人生を共有するこ とです。

完全主義者とは異なる

徳において成熟しようと努力することは、自分に陶酔するナルシスト的な態度とは似ても似つかぬもので

す。わたしたちは父なる神へのあたしたちは父なわたします。わたします。わたします。自分ではなったり、自分ではなったが、傾っているのです。よりというできるのは、というでは、いるでは、いるでは、いるには、ないがでは、いるにががないがある。というでは、いるにががないがある。というでは、いるにがいるにあるからです。

みじめな人間でしょう。死に定めら れたこの体から、誰がわたしを救い 出してくださるでしょうかし(ロー マ7・15、24)。たとえそのような状 況に陥っても平和を失うことはない でしょう。なぜなら、神が、聖パウ 口に対してと同じようにわたしたち にも「お前はわたしの恵みで十分 だ」(ニコリント12・9) と仰るから です。そうなると、わたしたちは感 謝と希望に満たされます。わたした ちが自分の限界を見ることによって 改心し、主に寄りすがろうとするな ら、主はそのネガティヴな面も利用 されるからです。

ここで再び、イエスが青年に言われた「善い方はただおひとりである」 (マタイ19·17)ということに寄る 辺を見つけます。神の子らは善いお方に助けられて生きている。神がわたしたちに力を下さり、本当に価値のあるものに全人生を向けさせ、何が善いもので、何を愛すべきかを理 解させて下さり、神から受けた使命 を果たすために自分を捧げることを 可能にして下さるのです。

ホセ・マリア・バリオ・マエストレ ロドルフォ・バルデス

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/tokuno-kannyou/(2025/12/10)